
三日月が見下す夜に

栞音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日月が見下す夜に

【Nコード】

N3622Y

【作者名】

栞音

【あらすじ】

無頓着に生きれば苦しまずに済む。身内が死んだところで僕の人
生に影響はない。そう思っていたのに。高所恐怖症だった姉が転落
死。事故か自殺か他殺か偶然か。真実を探し求めようとする自分に
動揺する。学校に忍び込み、鍵を手に入れ、”自殺禁止”の張り紙
が張られた錆びついてる屋上のドアを開けた。そこで、出会う。真
実の鍵を握る少女に。名前を消された指定ジャージを着ている少女
に。「その女が人間でも生物でも幽霊でも現実でなくとも、もし、
もしまた会えたら、話せたとしたら…あなたは素直に前を向いて歩

けるの？孤独な世界で偽者の夜空を眺めて綺麗だと言えるの？」

落下。自分の意思で落ちたのか他人の思惑で落とされたのか。

死人に口ナシ。彼女は何も語らない。死体は何も語れない。

白い布を被った姉はどんなに待っても動かなくて。体は

傷や痣だらけで白く美しい肌が不気味に感じられる。

表情筋は強張り、固まり、美人だった面影はない。

父は怒鳴る。母は喚く。妹は泣く。僕は見つめた。

冷たくなった姉を。脈もない手をぎゅっと掴んで。

検視によれば主な死因は転落死で間違いないらしい。

草花のお陰で地面に直撃は避けたらしく骨は数本折れた

だけだったとも医者に聞いた。ならば、なぜ姉は死んだのか。

高所恐怖症だった姉が、どうして転落死に屋上を選択したのか。

分からない。僕は姉の何を見てきたんだ。考えても分からなかった。

物事に無頓着な僕が、死にたくないから生きているだけの無意義な
僕が

姉の死を悔やんでいる。事故だろうが自殺だろうが他殺だろうが関係ない。

身内が死んだところで僕の人生に影響はない。そう思っていたのに。

真実を探し求めている自分に動揺する。アイデンティティが

崩れていく。造り上げた道が歪んでいく。侵されていく。

どんなに、頑張って努力したって過去に戻れなくとも

姉が最期に残した言葉の真意を僕は知らなきゃいけない。

足を震わせ、階段を1段1段と躊躇うように上る。

生徒会に所属する友人Aに借りた屋上の鍵を握り締めて。

ドアに張られた紙には立入禁止ではなく、『自殺禁止』の文字。

行書で達筆に書かれている文字の上手さがなんとなく腹立だしい。

誰だ、こんなものを書いたのは。姉は自殺する愚かな人間ではない。

父に似たのか、自分の信念や正義を簡単に曲げられる人ではなかった。

屋上のフェンス前に3年生指定の赤いラインが入った姉の上靴が発見され、

自室の机の中には遺書のような手紙が残されていたので、警察も学校側も

飛び降り自殺だと判断した。理由は学力。首席を維持していた姉の成績が

落ち、奨学金制度の対象から外されたことがショックだったのだらうと

推測されて。学校で自殺だなんて傍迷惑な。責任者はその程度の

認識だっただろう。不運。それが大人の捉え方。起きたものは

仕方がない。今後は、どう事件を対処し、世間に対応するか。

世間をなるだけ騒がせず、評判を落とさず、有耶無耶にして。

ニュースで文字だけが流れ、新聞で小さな記事に取り上げられ、

波風立てずに穏便に、姉のメンタルの弱さが原因だったと言われた。

悔しかった。そんな馬鹿な話があるか。ビジネスマンの父のお陰で僕は

金銭類に関して不自由なく生きてこれたんだ。学費に困るなんて有り得ない。

奨学金は付属品にしか過ぎなかった。そして、プライドの高い女でもなかった。

追い抜かされた人間に見下されても皮肉めいたことを言われても姉ならば

馬鹿正直に相手を褒めるだろう。本心で。嫌味などの感情は含まずに。

世界を愛す世間知らずな姉だったが、人を気遣う心と常識は持っていた。

見知らぬ人でも困っていたら声をかけ、自分まで一緒に悩んでしまおう人だ。

どんな人間も綺麗な心を持っている。それでも、悪い人がこの世にいるのは

可哀想な境遇で生まれ、人間としてよろしくない環境の所為だと信じてたんだ。

僕は姉がいつか宗教勧誘に惑わされるのではないかと心配するフリをしていたが

それは無駄に終わったワケで、どうでもよいだろう。もう、姉はいないのだから。

誰かの為なら自分の才能が利用されることを光栄だと偽りなく言えてしまう

姉が苦手だった。他人の為に生きたいと願う姉が僕には羨ましかった。

必要とされるまでどこまでも努力する姉の姿を弟として見てきたが、やっぱり、どうしてもそこまで頑張れるのか理解出来なかったし、

受け入れたくもなかったのだろう。知らなくてよい世界も

あるのかもしれない。こういう人種もいる。そう捉えて。

つまり、そんな姉の成績が落ち、奨学金がなくなっても

順位や通知表が上がっても下がっても姉は何も変わらない。

負の感情を向けられても相手を哀れむだけだということが言いたい。しかし、高所恐怖症の姉がこの屋上に足を踏み入れたのは事実だろう。

問題点は、勉強に集中できなかった理由。姉に”何か”があったということ。

ガチャリ。

鍵を回転させ、唾を飲み込み、ドアを開けた。

ギィィィ。

僕の手は足は体は震えて騒ぎ出す。恐怖ではない。

無上の喜びである。この屋上から落ちて姉は亡くなった。

1年前のこの日も、こんな風に少し肌寒かったのだろうか。

深夜の学校に忍び込むとき、どんな感情を抱いたのだろうか。

優等生らしく罪悪感か。それとも、考える余裕などはなかったか。

知りたかった。姉の全てを。最期に見た景色は何色だったのだろうか。

?

僕は1年前に姉が最期に見た景色を見ているんだ。

この場所で、この時間に、この景色を見たかったが為に

入試で最高点を狙い、入学式で新入生代表挨拶を引き受け、

委員会は学級委員に自ら立候補し、期末テストは首席キープ。

生徒会の推薦は勉学に集中したいのと失礼のないよう断った。

通知表も何処の誰に見せても恥じぬ数字を並べ、優等生のフリを。

姉のように凜と正しく真面目な期待される優等生を演じてみせた。

姉の生き写しのように生きる僕を気持ち悪いと狂っていると母は

侮蔑の眼差しを向けた。本当のお兄ちゃんはどこ？と妹は

涙を浮かべていた。父はそのまま頑張れと褒めてくれた。

高校生活を送る上で必要なものは何だろうか？姉なら

「うーん。大切なモノを間違えない心…かな」と

答えてくれるだろう。目を瞑れば聞こえてくる。

天国から僕に呼びかけてくれるソプラノ声。

目を瞑れば脳裏に見えてくる。幸せそうな

笑みを浮かべて高らかに笑い転げる姉が。

姉は永遠に僕の心で生き続けるだろう。

「どこに存在意義を求める必要があるの？」

不満そうに悲しそうに姉は質問を質問で返した。

人間は生きる意味を理由を根源を探し求める生物である。

存在意義を求めることは本能に従って生きることだと僕は思う。

だから、来た。僕の存在意義を掴む為に。姉に起きた真実を探す為に。

ガタッ

僕はフェンスに上る。屋上を囲うフェンスを軽々と飛び越えた。

「人間より綺麗なものはあるのかな」雲がない澄んだ夜空を見上げ、深呼吸する前に疑問を溢す。姉は人間より素晴らしいものは存在しないと言っていた。

姉が人間の神秘を楽しそうに語る姿が鮮明に思い浮か

べられる。

「人間ほど汚いものは存在しないわ」

あどけない少女の声が背後から聞こえた。ガシャン。背中にぬくい重みが与えられる。

誰だろう。聞き覚えのない声。当然、ソレゾレ逆方向を見ているので顔が見えない。

「ごちゃごちゃとくだらないことで悩んで苦しんで溜め込んでも本能に従って生きる。」

後先短くなっても社会貢献し終えても必要とされなくとも毎日寝ては起きては

理屈ばかり並べて権利を主張する人間のどこが綺麗だと言えるの？」

うんざりとした口調で少女は問うた。姉なら、どう答えるだろう。

「それでも。そんなところも全部ひっくるめて素晴らしいんだ」

『あなたも心を持てば世界が愛おしく思えてくるわ』だろうか。

「下等生物を見下して、社会問題だと騒ぐ人間が素晴らしいの？」

括りが大きいな。「人間は遺伝と環境で変化し、成長し、進化しているから」

多種多様な人格が生まれる。長所は、良く言えば個性で、悪く言えば欠点になる」

はあ。どうして僕は顔も見えぬ少女に語っているのだろう。「だから、人間を」

一括りにするな。屋上を囲うフェンスを挟んで、背中を預け合う僕と少女。

ふっ。と少女が笑った気がした。「あんたは夢を持って生きれる？」

「アタシはね、子供の頃から叶えたくても叶えられない夢を持っているの」

夢。そういえば、優秀な姉の夢を叶えるのは、ひねくれ者の兄のはずだった。

「キミは人間に産まれてきたことを後悔してるのかい？」「そうかもしれないわね。」

自分を優先する自分が嫌いなもの。相手を優先する偽善者も。見え透いた汚い心も」

三日月になりたい。アタシは無機物になりたいの。命は尽きる運命を持ち併せてるから。」

「ははっソレは興味深いな。キミは月の裏側は欠けているとでも言いたいのかい？」

「アタシは自分で見たもの以外は信じないって決めてるの」「衛星写真を見給え」

「ご、合成かもしれないでしょ！」んなワケあるか。現実主義者でもなくなる。

理屈を並べているのはキミじゃないか。「ふん。あんたはどつなのよっ。」

「肉眼では確認できない星になりたかったと思ったことはあるよ」

姉の主義に従い、ふざけた質問には真面目にふざけて答えた。

声からするに幼い印象を受けるが、この女の子は誰だろう。

深夜だぞ。学校だぞ。屋上だぞ。何故ココにいるんだ？

誰か来るなど予測しておらず、鍵は閉めてなかったが

女子生徒が自殺したと噂された立入禁止の屋上に

入ろうとする人がいたとは。一体どんな神経を

しているのだろうか。という疑問は自分に

そのまま跳ね返ってきてしまうので

投げかけなかった。投げかけなかった。

驚いた様子で「あんた兄弟とかいたりする？」

おそろおそろというか期待するように訊ねられる。

「いたよ」過去形。「ひねくれ者の兄と優秀な姉がね」

その姉も僕が現在立っているこの場所から落ちて死んだ。

その上の兄に妹は会ったことがない。「車に轢かれちゃった」

高3だった兄が18歳の誕生日に。妹のミカが産まれる前日に。

何の因果だったのか。親戚方はおめでとうとお悔やみ申し上げた。

産まれてはじめて出席した葬式が兄だったとミカは覚えてないだろう。

少女は勝手にがっかりし、どうでもよさそうに「ふーん。間抜けな2人ね」

と勘違いした。もし、その優秀な姉はココから転落死したんだと言っていたら

僕らは会わなかったことにしただろうか。「アタシにもいたわよ。お兄ちゃんが」

ガシャン。屋上を囲うフェンスを上る。背中越しに聞こえていた声はだんだん近づく。

「弱虫で泣き虫で頼りなかったわ」過去形だった。30cm程度しかない足場に腰掛け、

空を切るように足をぶらぶらさせる。落ちれば姉のように無事では済まないだろう。

恐くないのか。「キミは家族と他人との境目はどこにあると思う？」

「何よソレ」

僕もフェンスを背もたれにして少女の隣に腰掛ける。少女はジャーシだった。

見覚えがある。この学校の指定ジャージだろう。「…否、なんでもない」

しかし、月と星の明かりは暗くてよく見えないが、それはボロボロで

名前が消されていた。ラインは青色。1年生。僕と同学年だった。

「今夜も三日月が素敵ね」うっとりした視線で少女は夜空を見渡した。

ココが何処だか理解しているのだろうか。真夜中の学校の屋上の

フェンスの外側だぞ。姉が見た最後の景色を知りたくて僕は

臆することなく飛び越えたが、この少女も迷うことなく

足をグラウンドがある外側に放り投げて居座った。

この子が誰であろうとどうでもいいけど「今夜も？」

だんだん興味が湧いてきた。姉が転落死したこの屋上は

すぐに生徒立入禁止で封鎖されたが、幽霊やらオカルトやら

噂に振り回された生徒が好奇心に胸膨らませて騒がれていたらしい。

階段付近で叫んで上っては下りを繰り返し、寒気がしたただか見えただとか。

肝試しや度胸試しスポットにされていたとか。でも、そんな噂も落ち着いた頃に

屋上へ繋がる階段から転落し、入院した先輩がいた。誰かに突き落とされたとか。

告白していたが、ソレは体を張った嘘だと見抜かれ、誰も相手にしなかった。

そんな阿呆で惨めな先輩が退院したかどうかはどうでもよいので語らない。

3年生が卒業して僕らが入学してからは飽きたのかパタリと噂も静まって

屋上に近づく物好きもいなくなったと聞いていた。僕は今日が来るまで

状況と条件が揃う機会が来るまで努力し、思いを馳せ、待っていた。

姉が最期に見た景色を見たくて。もちろん、誰にも告げていない。

疑問を口にする。「キミは昨日もココに来たのかい?」「そうよ」

三日月を見つめたまま答えられた。「鍵が閉まっていただろ」「そうね」

まさか。「合鍵を作ったのか?」「ハズレ」生徒が亡くなり、噂が広まった後は

学校側が管理を怠った所為も否めないとのことで鍵の保管場所は厳重になった。

僕がこの鍵を手に入れるのだって半年以上も時間がかかってしまったんだ。

そう簡単に盗み出すことも、合鍵を作ることも、出来るワケがなかった。

そもそも姉が死んでからこの1年で鍵は3度も変わったのだし。

「決められた道は嫌いなもの」意味ありげに微笑む少女は

手を合わせる。「三日月になれますように」と願いを込めて。

姉は父方の苗字を名乗っていたので、僕は母方の苗字で学校生活を送っている。

怪談話や幽霊話に花を咲かせず、話を合わせるように姉の情報を集める為に。 真実を

知る為に。 屋上の鍵を手に入れる為に。 信頼を芽生えさせるのに時間がかかったが

庶務とはいえ、生徒会に属する人がクラスにいたのは幸運だった。 その友人 A に

転落死した弟だから屋上の鍵を貸してくれと言ったわけではない。 飽くまで

自分の身分と目的を隠して器物損害に当たってしまうことを事故に見せかけた上で計画的にだ。 正式に借りたわけではないので

帰りに職員室に忍び込んで返しに行く手間はあるが。

それでも、成功したんだ。 こうして、僕は屋上にいる。

だから、見知らぬ少女が屋上に入り、フェンスを飛び越え、

当然のように僕に話しかけてきたことが不自然でおかしかった。

少女は僕が屋上に来るのを知っていたはずがない。屋上のドアが開くと

知れるワケがない。実際には、少女は昨日も一昨日も気まぐれに訪れていて

ドアから侵入したのではなかったが。ソレを僕が知るのもう少し先の話でして。

深夜の学校に忍び込む人がいると僕が思わないように少女も誰かがいると思わない

はずだ。しかし、少女は動揺しなかった。それどころか、僕を動揺させる言葉を投げた。

「遅えぞ、梅垣」臆することなく椅子に腰掛け

だらしなくネクタイを緩めて制服を着こなす友人A。

「他のヤツらバラバラでよお…知らねえのばっかいるぜ」

飛永の後ろ座席に荷物を下ろす。「諸戸さんは文系だっけ」

四月。学年トップだった僕は、2年前の姉と同じく理系クラスを

希望し、親しい友人はおらず、留年とも縁の欠片もなくクラス替え。

生徒会庶務の飛永は、携帯を弄って「茄那は5組の鳩先クラスだよ」

バスケ部の彼女を心配する。「…それはお気の毒に。人を巻き込むなよ」

諸戸さんは昨年のクラスメイトで派手な外見や騒がしい性格で誤解されやすく、

一部の女子から嫌われていたようでもちょっとした揉め事があった。陰湿なイジメを

していた女子に「ダサッ」と正面向かって言ったとか。悪事や感情を包み隠せないように

彼女は良き事も悪き事も他人事でもストレートに発言してしまう。詳しく何があつたかまでは

知らないが、敵を作りやすいのだろう。飛永はその裏表のない性格に惚れただとか言ってたが。

「オイオイ。相手は生活指導の鳩湯だぜ？もうとっくに目付けられてるだろーよ」お手上げだ

と両手を挙げたポーズをする。ピロリロリン。手に持っていた飛永の携帯が鳴り出した。

噂をすれば。彼女からのメールだったらしい。「ワリイ。ちょっくら、行つて来るわ」

「始業チャイム鳴るぞ」僕は無意味な忠告をし、改めて新たな教室を見渡す。

学年が上がったからといって規模も構造も変わらない。緊張してるのか

知り合いがないのか割合大人しく一人で過ごしてる人が多い。

「あの。すみま。せん」ぎゅっと鞆を掴む手が震えていた。

茶髪を三つ編みにした女の子。太ぶちメガネがずれる。

「座席。どこ。分かり。ますか」不自然な途切れ方で

俯きながら訊ねたのは昨年もクラスメイトだった荻原さん。

先生の指示はなかったよと伝えるとキョロキョロと目を泳がせ

「失礼し。ます」空いていた席。僕の隣に決めたようだ。「あの。」

荻原さんは座ろつと椅子に手をかけるが「迷惑で。したか」上目遣いで

不安そうに聞く。う。可愛い。おどおどとした態度が小動物みたいで可愛い。

スカート丈は膝下だし、メガネは古そうだし、オシャレに興味なさそうだけれど

三つ編みほどこいたら雰囲気変わると思っただよなあ。一つ一つの仕種が危なっか

しくて目が離せないのに、一緒に居るとつい空気に包まれて穏やかに和んでしまう。

そんなことない。僕は首を左右に振って否定する。そんなに周りを窺はなくとも

誰も荻原さんを嫌いにならないのになあ。「嬉しいよ。とっても飛永しか

友人はいないと思ってたし。かあつと頬を染めて「ぐ。け。が。えと」

ガシャン。荻原さんは筆箱を落とした。「モリ熊」の筆箱を拾う。

「すみま。せん」謝らないで、と渡し、熊が「好きなの?」

ガツシャン。訊ねると慌てたように「すみみ。ません」

再び落とした筆箱を拾った。「可愛いよね。ソレ」

リングを丸かじりする熊。「妹も好きだから見たことある」

「どのシ。リーズ。ですか」「たしか、メロンver.だったかな」

壊れた。「わわわわわ」荻原さんが壊れた。目を輝かせて

「スゴ。イです」「羨ま。しいです」と弾んで話し出す。

モリ熊はフルーツ盛りだくさんと森を掛けてると教えてくれた。

1年間。同じ学級委員で話す機会は何度も合って初対面のとときよりも打ち解けてくれたなあ。こうやって言葉をつつかかえながらも頑張っ
って話す

荻原さんは可愛い。応援したくなる。『モリ熊』は、リンゴやメロ
ンだけではなく

色んなフルーツが売っているらしい。妹のミカの誕生日も来月に迫
ってきたし、

プレゼントに良いかもしれない。「荻原さん」「はい」小物とか大
好きだし。

「僕と付き合ってくれないかな」

小さな口をパクパクと開けて「は。う。む。ぐあ」よく分からない
声を

出された。「妹にモリ熊を買ってあげたいんだ」と説明すると

「あ。そゆこ。とです。か」と頂垂れ落ち着きを取り戻す。

「かしこま。りました」荻原さんはずれた分厚い太ぶちメガネをか
けなおす。

しどろもどろになりながら「不束者で。すが」とお辞儀された。天
然100%だ。

でも。そんなところが「可愛いんだよなあ」と言葉を漏らすと教室の
ドアが傷ついた。

「^{とんひ}鷹將軍。眼球が腐りました。助けてください」「では、早速治療
しましょう。オペの準備を」

キンコーン。カーンコーン。チャイムは繰り返す。「分かりずら
くイチャツかないでくれ」

諸戸さんと飛永は2人で同じ椅子に座る。「5組に戻らなくて大丈
夫？」出席点呼の時間だけど。

「担任なら来ねえぜ」諸戸さんに聞いたのに飛永が答えた。「そん
なことより、手術を。第一患者を」

優先してください」カチカチと携帯を弄りながら飛永に寄りかかっ
てるのは、彼女の諸戸さん。

訳。私の話を聞いてください。「職員室に行ったんだけどよお」飛

永も携帯を弄りだし、話し出す。

「深刻な顔で、始業式中止するわけにはいかない。でも、保護者が。評判が。って騒いでたぜ」

荻原さんは首を傾げた。そこで、やっと気付いたらしい。「なんだ、いたのか。相変わらずだな」

「ごめ。んなさい」ペコリと荻原さんは謝る。だから、そういうのがよお…と忠告し始める飛永を

僕は遮る。「なんで職員室に行ったんだい?」「まあ…その、「歯切れ悪く答えるので「抗議しに」

諸戸さんが答えた。「私がどうして鳶と離れなくてはいけないのかご説明を願おうと思ひまして」

分かるだろ?と飛永はジエスチャーする。暴走して生活指導の鳩湯先生と揉める前に止めよ

うとしたのだろう。「授業を受ける眠たそうな表情が今後一切見られなくなってしまうなど

私にはとてもとても耐えられません」「んなの見てんじゃねえよ!」だから、イチャつくな。

案外。2人はお似合いだと思っている。美男美女。生徒会の飛永鳶とバスケット期待の諸戸茄那。

「離れて募る恋心とも言っし、会えない時間が増えるほど、飛永が

優しくなるかもよ」「否定します」

飛永と同じクラスになりたかったなら、理系クラスを選べばよかったのに。嘘でも吐かれたのか。

「梅垣。適当なこと吹き込んでんじゃねえよ」「まあ、僕が巻き込まれなければどうでもいいけど。

問題を起こされては困る。飛永は目立つ存在だから。生徒会というのもあるが、派手な容姿が。

生徒会長を目指すには相応しくない頭髪だと思うけど、それは古くさい考えか。

否、問題はそこではなく。つまり。一緒にいる僕までもが目立っては困るということ。

悪い意味で。『転落死について調べまわっている男子生徒がいる』と噂になっては動きにくい。

「鳶は、私の鳶は誰よりも優しい心を持っていますから。これ以上優しい人間にはなれません」

優しい心。僕は、姉に出会うまでそんなものを信じていなかった。人間は優しいフリは

出来るが、優しくなれない。他人の為には優しくなれない生物だと思っていたから。

「席に着きなさい」

担任と思われる男性が咳き込んだ。教室は静まる。

ゾロゾロと適当に席に着く生徒に紛れて諸戸さんは帰った。

自宅ではなく自分の教室に帰ってることを願おう。飛永は僕と荻原さんに

彼女がいたことを黙ってもらおうよう人差し指を口に添える。コクリ。頷いておく。

「挨拶は後回しにする。全員いるな?…突然だが、今日の始業式は中止だ。荷物を纏める」

ピーポーピーポー。パトカーのサイレンが繰り返される。学校に近づいてるのか音が大きくなる。

警告。窓の外を見て立ち上がる生徒が1人。3人。ゴホッ。わざとらしく咳き込み「席に着きなさい」

渋い声で怒鳴る担任。初日は嘗められないようにと威張ってるのは違う。そんなものを見るなど

目を瞑る。外に何があるというんだ？「先生」と窓際に座ってる黒髪の女子生徒が手をあげる。

「…どうして救急車を呼んであげないんですか」

結局。何があったのか詳しく全校生徒に説明されないうまま始業式は中止になった。

ピンポンパンポンと校内放送が流れる。落ち着いて生徒は速やかに帰りなさい。

先生方は事情聴取がありますので、時間がある方からお集まりください。

飛永は生徒会長である兄貴なら何か知っているのではないかと電話をかけるが

「繋がらねえ」「電源を切られているようだった。」「あんのクソ真面目野郎がっ」

会長は機械音痴ではないが、一日中、携帯を見ないのは普通らしい。煩わしいから、とサイレントモードに設定されているだとか。

「お兄様は既にご帰宅されているのでは。私たちも、帰りましょう」「お前は俺ん家に来ただけだろ」諸戸さんの無表情は無表情になった。

僕は廊下側の席だったので窓の外に何があったか見ていないし分からない。

始業式が中止。只事ではないのは説明されずとも、全校生徒に伝わっただろう。

校門裏に止まったパトカーは赤く赤く光っていた。姉が転落死したときはもつと

たくさんの警察が学校に乗り込んでいたのだろうか。ガチャン。自転車の鍵

を外し、押す。「僕も駅まで歩こうかな」何があつたか分からないから

不安だというのもある。「すみま。せん」荻原さんはまた謝つた。

何か分かつたら教えてくれ、と飛永と諸戸さんに別れを告げてゆつたりと歩く。

飛永に抱きついて自転車の後部座席に乗る諸戸さんは「発進して下さい」と笑つてた。

笑顔。諸戸茄那は笑うことができる。飛永の前だけ。私立中学に通つていた僕は、2人に

何があつたのか知らない。ガキのときから無愛想なヤツだったぜ、と飛永は話していたけど

違和感を覚える。無愛想？たしかに、彼女はあまり感情が表情に出ないようだが、違うだろう。

飛永の前では笑っているではないか。教師の前でも女子の前でも諸戸さんは無表情なのに。

他人には見せない笑顔の正体に、飛永は気付いているのだろうか。知っているのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622y/>

三日月が見下す夜に

2011年11月20日20時12分発行